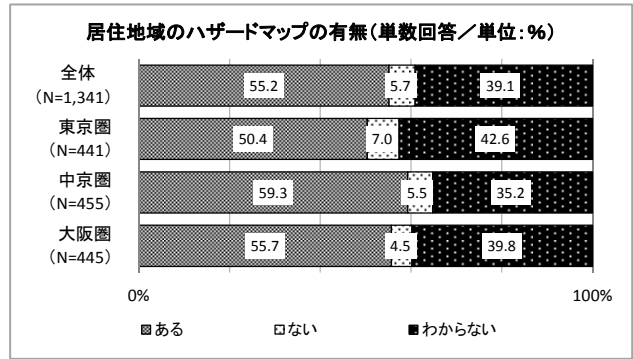


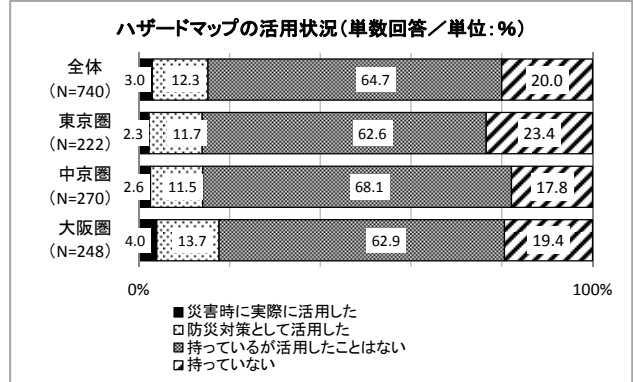
◇依然として約4割が、自分の住む地域のハザードマップの有無が「わからない」

前問のハザードマップを「聞いたことはない」人を除いて、居住地域のハザードマップの有無について聞いたところ、「ある」が昨年から5.9ポイント増の55.2%、「わからない」が3.8ポイント減の39.1%となりました。数値は下がったものの、依然として約4割が、自分が住んでいる地域にハザードマップがあるかどうか「わからない」人ということになります。



◇実際の災害時も含めた活用率は15%程度

前問で居住地域にハザードマップが「ある」と回答した人を対象に聞いたハザードマップの活用状況は、「災害時に実際に活用した」が3.0%、「訓練時に防災対策として活用した」が12.3%で、これらを合計した活用率は15.3%でした。認知率は約5割のハザードマップですが、その活用率は、まだまだ充分とは言えないようです。



水と文化／東京・大阪・中京圏

昨今、日本を訪れる外国人観光客が増加しており、2020年の東京オリンピックに向け、この流れはさらに加速することが予想されます。そこで、迎える側である日本人の自国文化に対する意識を探る一環として、外国人に紹介したい“日本の水文化”について、今回初めて聞いてみました。

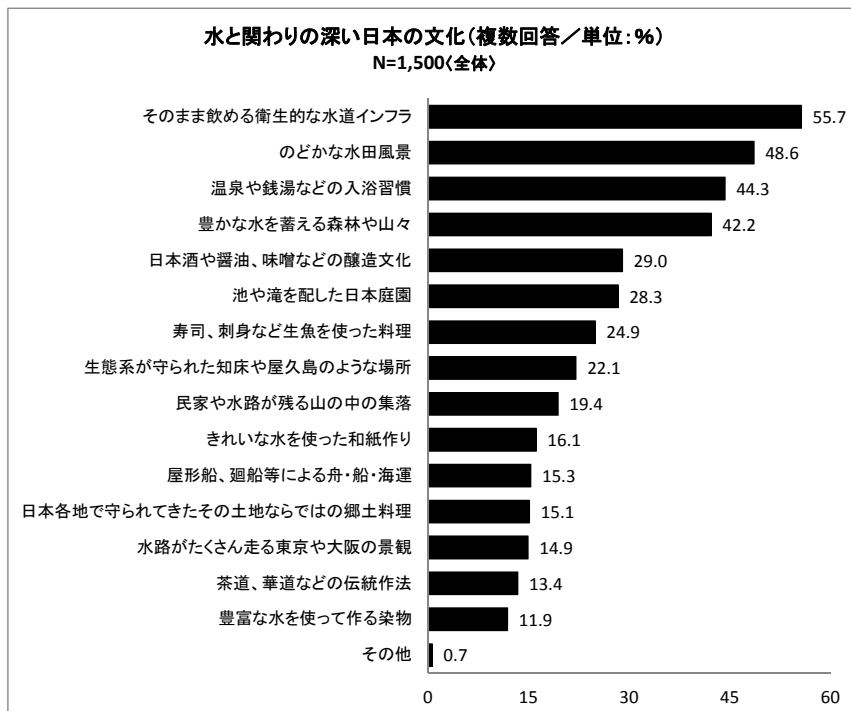
Q.水と関わりの深い日本の文化は？ (15択+その他)

Q.外国人に紹介したい「水と関わりの深い日本の文化」は？ (15択+その他)

◇1位は「そのまま飲める水道インフラ」

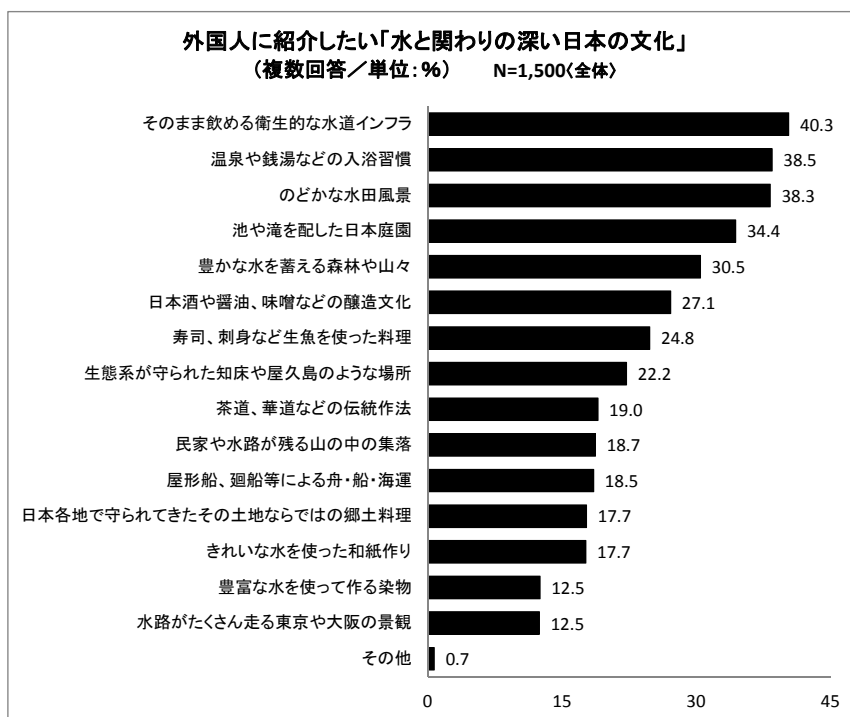
“日本の水文化”としてイメージするものは何でしょう？

まず、「水と関わりの深い日本の文化」について、選択肢を提示して聞いたところ、1位は「そのまま飲める衛生的な水道インフラ」(55.7%)、2位「のどかな水田風景」(48.6%)、3位「温泉や銭湯などの入浴習慣」(44.3%)と続きました。なお、「水道インフラ」は、性別、年代別、居住地別のすべてでトップでした。



◇外国人に紹介したい水文化も、同じく「水道インフラ」が1位

次に、同様の選択肢で「外国人に紹介したい水と関わりの深い日本の文化」を聞いてみると、こちらも「水道インフラ」(40.3%)がトップとなり、2位「入浴習慣」(38.5%)、3位「水田風景」(38.3%)でした。多くの人が自然や伝統ある水文化というより、「そのまま飲める衛生的な水道インフラ」といった日本の技術力を、海外に対して誇れるものとして捉えているようです。



日常の水意識／東京・大阪・中京圏

Q.水の使い方は？ (4択)

◇節水している人が半数割れ

5年前との比較で、15.8ポイント低下

「家庭における水の使い方」は、ここ数年、節水を行っている人の割合が低下の一途をたどっています。今回も、「かなり節水や再利用をしている」人が昨年から2.7ポイント減の6.9%、「多少節水や再利用をしている」人が3.0ポイント減の39.1%で、この両者を合計した「節水を行っている人」は46.0%と半数を割り込み、節水意識の低下は止まりませんでした。

近年の節水意識の低下度合いを測る目安として、5年前(2010年)と今年の結果を比較したところ、2010年は「かなり節水や再利用をしている」人が9.9%、「多少節水や再利用をしている」人が51.9%、両者を合計した「節水を行っている人」は61.8%となり、この5年間で15.8ポイント低下しました。

